

あしのある蛇

昔、建福寺の山門の近くにそれは見事な大杉が三本ありました。その大きさは大きな牛を隠してもわからない程、枝葉がこんもりとしていました。庭はきは小坊主達の仕事です。

ある朝いつもの様に大杉の下を掃いていると「ドサッ」と目の前に落ちて来たものがあります。

「ヒュー。」

小坊主達はすつとびました。こわこわ近づいてみて見ると大きな蛇なのです。しかも体の両わきから足が出ていて、それがウニョウニョと動いているではありませんか。もう庭はきどころではありません。小坊主達は、ホウヤをなげとばし、本堂へかけ込み

「和尚様——。へび——。」

「足があるへび——。」

「おばけのへび——。」

口々に叫びました。和尚様はお経をあげるのをやめ

「そろそろしいぐへびがどうしたのだ。」小坊主達は、ワ

イワイガヤガヤ大きわざ。それならば、と和尚様も大杉の下へとやって来ました。その時もう蛇は死んで動かなく、ながくのびていました。長さ二m。ふとさ十cm。尾から三十五cmのところ三m位の足が左右に一本ずつ出ていて、その先きに爪の形の様なものが左右で二十八個もついています。和尚様はおもむろに

「蛇に足があるとは思議なことじゃ。多分、竜神の子孫であろう。手厚く葬るがよい。」といました。弟子達は、お線香をあげ、水と花を供え、近くに穴を掘り

「あゝ、もしお前の魂があるならば、末ながくこの寺をもまっけて下さい。」

と祈りながら、お経を書いた文と共に蛇の死体をうずめました。建福寺の鐘つき堂の近くに「煉蛇碑」と刻まれた一m位の石碑が今でも残っています。

☆煉（えい）は、うずめるの意味。

☆さし絵は百年前のかわら版の号外です。

時至丙寅然日
蕉雲生

